

## 第11回「中村元東方学術賞」授賞理由

受賞者 立川 武蔵

国立民族学博物館教授

第11回中村元東方学術賞審査委員会報告

審査委員長 前田専學（東方研究会常務理事）

2001年10月10日インド大使館

立川武蔵博士の学問研究の出発点は、中国・日本で八宗の祖師と仰がれている龍樹（Nāgārjuna 150-250）の『中論』（*Madhyamaka-kārikā*）の研究であります。周知のように、龍樹の『中論』は、大乘仏教の基本的立場を『般若経』の説く空に見出し、これこそ仏の教える縁起（*pratītyasamutpāda*）の説の真意であることを強調しております。学生時代、名古屋大学で、空思想の宗教哲学的思索を常に深めた上田義文教授に師事した立川武蔵博士の長年にわたる『中論』研究の成果は、名古屋大学に博士請求論文として提出され、一九九四年（平成六年）に『中論の思想』（法蔵館）として出版されました。この重要なテキストをめぐっては、すでに多くの碩学の研究が数多くありますが、立川武蔵博士は、形式論理学と宗教学的理論モデルを駆使して、空思想の理解に新しい地平を拓かれました。この研究によって、一九九七（平成九）年、第五〇回中日文化賞を受賞されました。この研究は、後に英訳され、*An Introduction to Nāgārjuna's Philosophy*, tr. by R. Giebel (Motilal Banarsidass, Delhi 1997)として、インドから出版されました。

さらに立川武蔵博士は、留学されたハーバード大学でD.H.H. Ingalls教授に師事され、その鋭い研究の矛先を、空の思想のみならず、それに対立するインドの実在論の研究にも向けられました。その研究の成果は、一九七五（昭和五〇）年に、*The Structure of the World in Udayana's Realism*として、アメリカのハーバード大学に学位請求論文として提出され、一九八一（昭和五六）年に、オランダのReidelから出版されました。これは、ヴァイシェーシカ学派とニヤーヤ学派の両学派を大成した、インドの十一世紀のウダヤナ（Udayana）の著書である『キラナーヴァリー』（*Kiraṇāvālī*）と『ラクシャナーヴァリー』

（*Lakṣaṇāvālī*）に基づいて、ウダヤナの実在論を解明し、実在論と仏教やヴェーダーンタ哲学などの唯名論との思想上の相違を浮き彫りにした、まことに独創的な研究であります。

従来のヒンドゥー教、密教、チベット仏教に関する研究は、文献学的研究に偏っていたことは否めない事実であります。立川武蔵博士もまた、研究の最初の段階においては、チベット仏教に関する原典研究として、『西藏仏教宗義研究（第一巻）一トウカン『一切宗義』サキヤ派の章一』（東洋文庫、一九七四）などを出版しておられますが、次第にそれを越えて、文献学的研究を重要視しながらも、図像学的あるいは現地調査による民族学的といった多面的な学的態度によって研究を進めて、新生面を切り開いておられます。例えば、『曼荼羅の神々』（ありな書房、一九八七）、第三回アジア・太平洋特別賞の受章の対象となった『女神たちのインド』（せりか書房、一九九〇）、や『ヒンドゥー教の神々』（石黒淳、菱田邦男、島岩との共著、せりか書房、一九八〇）などは、ヒンドゥー教への図像学的アプローチの成果であります。また、インドで出版された *Pūjā and Samskāra* (S. Hino, L. Deodhar との共著、Delhi: Motilal Banarsidass, 2001) や *Indian Fire Ritual* (S. Bahulkar, M. Kolhatkar との共著、Delhi: Motilal Banarsidass, 二〇〇一) などは、南インド・プネー市周辺やカトマンズ盆地の現地調査にもとづくヒンドゥー教の儀礼の研究であります。

立川武蔵博士の関心は、インドとチベットにとどまらず、中国仏教にも及び、その学殖が『中論』研究や日本仏教研究にも生かされております。『日本仏教の思想』（〔現代新書一二五四〕講談社、一九九四）、『密教の思想』（吉川弘文館、一九九八）、『最澄と空海』（講談社、一九九八）などは、中国仏教の学殖を踏まえながら、インド思想・インド仏教を視野に入れた歴史的観点にもとづいて、それがどのように日本仏教に受容されていったかを明らかにするとともに、インド仏教との違いを明確にしておられます。

その他、立川武蔵博士は、『インド・アメリカ思索行』（山と溪谷社、一九七八）、『はじめてのインド哲学』（〔現代新書 1123〕講談社、一九九二）や『インド・ネパール 聖なるものへの旅』（人文書院、一九九四）等々種々の入門的・啓蒙的な好著を出版されています。

立川武蔵博士の学問は、単なる文献学ではなく、単に学問のための学問ではありません。その目指すところは、現代思想としての仏教を再構築するところにあるように思われます。立川博士の言葉を借りれば、学生の頃からの夢であった「仏教神学」の確立を意図されているのであります。この場合の「神」とは、キリスト教におけるような絶対神に対してのみ用いられるのではなく、その語を広義に用い、それぞれの宗教における「人格（ペルソナ）を伴う聖なるもの」を意味するとし、その「神」と自分自身の交わりをもちながら、時代の状況との対決に関する体系的叙述を「神学」と呼び、「仏教神学」を「仏教教義学」と同義語

とされています。その一つの試論は、『現代思想としての仏教：ブッダの哲学』（法蔵館、一九九八）であり、いまや立川武蔵博士の夢が現実となりつつあるように思われます。

総括すれば、立川博士は、インド学・仏教学の伸展に大きく貢献されたばかりではなく、従来のインド学・仏教学を踏み出して、独創的・思索的な独自の道を開拓されつつあり、二十一世紀の仏教研究に貴重な示唆を与えるものであります。以上の理由によって、立川博士は、中村元東方学術賞を授与するに相応しい業績を挙げられたものと判断されます。